別府ダイバーシティアカデミア

～私たちが育んだやさしさとしなやかさ～

株式会社JTBコーポレートセールス

実施団体	株式会社ＪＴＢコーポレートセールス
実施時期	2016 年 11 月～2017 年 1 月
場　所	大分県
概　要	多文化が共生する国際観光都市、大分県別府市を舞台に、2020 年に向け、多様性・寛容性のモデルとなる市民意識形成に向け、地元企業、大学、市民が参画したコンソーシアムを編成し、ワークショップを実施。車いす体験、障害者、外国人、LGBT 誰もが入れる温泉の入り方講座などを実施。
効果検証方法	・寛容性・多様性を育んできた別府で実践を基に知見をまとめ、可視化する効果 ・各参画団体の「別府ダイバーシティアカデミア」実施の総括と、今後、2020への向けた機運醸成に向けた、それぞれの団体での別府における活動ビジョンや、活動目標などをレポートとして提示 ・イベント・ワークショップ参加者へのアンケートを通じ、別府の持つ多様性・寛容性についての意識や、2020に向け、別府を舞台にできることなどの当事者意識がどう育まれたかを検証

試行プロジェクトの概要

実施目的

大分県別府市は、港町として開けてきた。そのため、域外から流入し、商売を始めて定住するものも多い。別府の気質として、不要な詮索をしない、世話を焼きながらも人との距離感を大切にするといった寛容性があるといわれており、人の流入を促進したと考えられる。また、別府市は、障がい者スポーツおよび社会進出の先駆者である中村裕博士の出身地でもある。中村裕博士は、英国留学で、障がい者を当たり前に受け入れる社会環境に衝撃を受け、帰国後 1961 年に第 1 回大分県身体障害者体育大会の開催に尽力した。本委託事業では、別府のキーパーソンおよび有志市民を巻き込むプログラムを構成した。2000 年に別府市に開学した立命館アジア太平洋大学(APU)やゲストとして招聘した他地域の自治体職員等の視点を取り込むことにより、別府市民が「多様性」「寛容性」をキーワードに、市民意識、市民生活をより向上させることを図った。

プロジェクトの全体像

本プロジェクトにおいては、別府市民の市民である誇りの醸成を図るため、以下に示す 6 つの催

しを集中的に展開した。

プロジェクト名	開催概要
別府事業人まつり	日時:2016 年 11 月 23 日(祝)13:30～16:00 場所:ゆわいの宿 竹乃井ホテル
別府ダイバーシティアカデミア	日時:2016 年 11 月 24 日(木)14:00～19:00 別府市公会堂
APU ダイバーシティプレゼンテーション会	日時:2016 年 11 月 25 日(金)～26 日(土) 場所:ことばハウス
卓球バレーエキシビジョンマッチ	日時:2016 年 11 月 27 日(日) 場所:JR 別府駅コンコース
温泉国際平和会議	日時:2016 年 11 月 27 日(日) 場所:湯治柳屋 別荘「七草」
BEPPU ダイバーシティウォーク	日時:2016 年 11 月 28 日(月) 場所:鉄輪地区

試行プロジェクトの取組み内容

試行プロジェクトの内容

(1)別府事業人祭り

■取組み内容

小規模企業振興基本法(小規模基本法)の活用促進を通じて別府の事業者が誇りを持って新たな事業に取り組む機運を作るべく企画した。本企画の核となったのは、同法成立に尽力した人物の中から、自身が小規模事業者でもある宮本周司議員と、中小機構等を中心に「小規模基本法」の価値を全国に伝え歩いている立石裕明氏をコアメンバーとした講演会である。また、地元の経営者を招き、震災からの復興などの取組み事例と別府の商売人のスピリッツを来場者らと共有した。

温泉旅館経営者や、市内の小規模事業者、金融関係なども含め 50 人以上の集客があった。

(2)別府ダイバーシティアカデミア・シンポジウム

スペシャルトークセッション「私たちは日本一進んだ街に住んでいた！」

■取組み内容

第 1 部「女性活躍のパイオニア　別府の女将たちのしなやかさ」

温泉旅館の女将が集う「女将の会」より4名を招き、日々の活動を中心に「女将」という職業をひもとき、同じ女性として活躍する別府市料飲協同組合の方からの視点も交えて別府という街の特性に関してお話ししていただいた。ホテル白菊の西田社長、別府市長の長野恭紘氏、コメディアンの小

松政夫氏らにも登壇いただき、男性目線からの「女性活躍」など、さまざまな視点から「別府」と「女性」を考える時間となった。

登壇者より提示されたテーマとして、2019 年ラグビーワールドカップ・2020 年オリンピック・パラリンピックに向けて、おもてなしの体制を築くことが重要な課題であり、別府という街をスナックも含めて安全に楽しめる情報共有と案内体制を整理していく必要性が訴えられた。さらに人手不足も大きな課題となるが、8,000 人の学生がいる別府ならではの「おもてなしのスペシャリスト」育成のために、学校教育の中に観光に特化した学部や学科を作る動きも求められるとの意見が示された。

第 2 部「別府が生んだ日本パラリンピックの父　中村裕伝説」

『障害者スポーツの父といわれる中村裕博士の足跡、別府との歩みを振り返りながら、2020 年に向けて、別府が主役としてできることを考えていく』という内容で、2 部構成で進行した。

（前半）中村裕博士トーク

1964 年東京パラリンピックの立役者となった中村博士が別府に創設した「太陽の家」について関係者の方々にお話しいただいた。

障がい者にとっての別府の進んだ「雇用環境」「バリアフリー」は他県に比べてはるかに進んでいるものの、課題はまだたくさんある。一例として、障がい者用の温泉があるのも別府の大きな特徴ではあるが、あくまで障がい者と健常者がともに入らないといけない環境である。障がい者 1 人で入浴できるようにすることは、障がい者の自由度を向上させるため、更なる観光客増加が見込まれる 2020 年までには改善していたい事項である。こういった課題解決のためには、さらに深いコミュニケーションが障がい者と健常者の間に必要であるとの意見でまとまった。

（後半）パラリンピックトーク

障がい者アスリートの方々にご登壇いただき、過去のパラリンピック出場の経験談や、パラリンピックの現状、練習環境、2020 年のオリンピックに向けて必要なことをお話ししていただいた。

別府はトレーニング環境や障がい者への環境が充実しているため、たくさんの選手が集まる。一方で、その選手達を育成するコーチが不足している。コーチの育成が課題となるといった問題提起や、障がい者スポーツの認知度をあげていくことが必要だ、などの議論が交わされた。

第 3 部「混ぜる教育混ざる街立命館アジア太平洋大学から生まれた奇跡」

立命館アジア太平洋大学(APU)を題材にした書籍「混ぜる教育」を軸に、APU の「混ぜる」についてのディスカッションや、メディアや他県からどのように APU が見えているのか、「APU と別府の混ざり方」「APU と企業の混ざり方」などについて議論した。

別府市役所職員やAPUの在学生も登壇し、別府の街で国際学生が日常生活を通じて市民と仲良くなっていく様子や、店舗の主人が卒業して母国に帰った国際学生の結婚式に招かれることも珍しくないなどのエピソードを披露した。

また、内戦のあったリベリア出身の車いすを使う学生は、大学や交通機関をはじめさまざまなケアにより日常生活が送れていることなどを紹介した。最後は、別府市役所からの登壇者が、熊本地震時の避難所では、被害はないが不安に駆られて避難所に集まった学生らが、後には避難所で高齢者のサポートをするなどの光景があったことを紹介した。また、多様性のある街だからこそ災害弱者を生まない工夫が必要であると語った。

(3)APUダイバーシティプレゼンテーション

■取組み内容

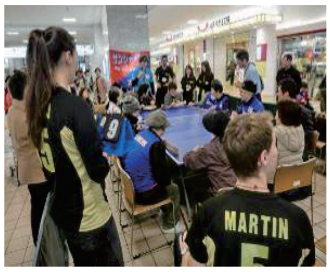
多様性を体現する立命館アジア太平洋大学の魅力・ポテンシャルを学生自身が発信することで、「APUがある別府」への期待を醸成することを目的として実施した。期間中、学生団体が多様性の下に集まり、「APUと別府をつなげる」ことをコンセプトとして企画を実施した。

1日めは、プレゼンテーション形式で海外インターンシップ実施団体の紹介を行ったほか、市民を交えた自主ゼミ、3か国の楽曲をギターで紹介するイベントなどを行った。

2日めは、10人に1人の割合でいるとされているLGBTについてのアウェアネスを高め、LGBTの当事者が生きていく上で壁となっている問題、障壁について話し合い、参加者の理解を深めた。また、APUの留学生らが4カ国5種類のカレーをふるまって多様な食文化を感じてもらった。

(4)卓球バレーエキシビジョンマッチ

■取組み内容



卓球バレーとは、障害の有無や年齢に関わらずできる別府発祥のユニバーサルスポーツである。2016年夏にはリオデジャネイロで本競技のデモンストレーションが行われた。「共生」を改めて感じられる機会として、この卓球バレーという競技を取り上げた。

計15試合、学生スタッフと太陽の家の障がい者の方々と一緒にエキシビションマッチを行った。子どもからお年寄りまで、足を止めて見学をする通行人も多く、積極的に声かけを行い試合に参加してもらうことができた。試合は、マイクでの実況解説も行われ、初めて見学・参加する人にもわかりやすいものになった。

(5)温泉国際平和会議

■取組み内容

「どんな国際問題が起きても、卒業生同士が別府に集まって温泉につかりながら語らうことで解決する」という、立命館アジア太平洋大学が開学当時に掲げた未来の理想を先取りして、10 カ国から 10 名の現役の多国籍学生が理念に思いを巡らせた。時事問題も話題にのぼり、国際間協調も睨んだリーダーシップのあり方や、あるべきリーダー像そのものに各国の違いがあっても相手国への敬意をもって問題の本質を見抜き、解決に向き合う姿勢を自分たちの世代は持つべきではないかといった議論が交わされた。

(6)BEPPU ダイバーシティウォーク

■取組み内容

APU の多様性というポテンシャルを今後、別府がどのように活用していくことができるのかを検証するべく、10 カ国からの学生と車いす障がい者、市役所職員らが一緒に多彩な視点で街を歩き、考察した。

参加者は二組に分かれ、ガイドと通訳とともにまちを歩いた。まち歩きでは、現在の石畳と昔の石畳の対比で街なかでのバリアフリー化への配慮などを学んだ。その後の懇談会では車いすのふたりが歩いて感じたことを共有し、学生達と国内外の観光地でのバリアフリー化の実態とハード・ソフトの両面からの対応を議論した。

本企画のまとめとして、最後に学生だけで総括を行った。具体的な意見として、買い物をする場所や英語表記の看板の必要性などが出された。また、APU の人的資源を活用し、それぞれの国向けに異なったコンテンツを掲載するアプリやウェブなどの作成も提案された。

プロジェクトに関する広報

別府ダイバーシティアカデミアの実施にあたっては、ポスター、チラシの制作と配布活動を実施した。また、プレスリリース配布や、地元新聞社の協力によるPR活動を実施した。

ポスター2 種（合計 1,000 枚）、チラシ 3 万枚を作成し、プロジェクト関係団体や APU 関係者、市内の旅館関係者、商店街、公衆浴場などへ設置を促した。このほか、別府市役所の協力を得て各自治体にも配布した。PR 活動としては、別府市市政記者クラブへイベントチラシを配布したほか、関係者の協力を得て地元テレビ番組等で告知を行った。また、ホームページや Facebook で広く情報発信を行い、事業に関心のある人々との関係づくりを促進するためにリアルタイムな情報発信を実施した。

効果と課題

各プロジェクト実施による効果

(1)別府事業人祭り

別府市の独自性は、別府市の温泉街ならではの寛容性が、人流を活性化させてきたこと、そうした外部人材を巧みに取り込んできたことで作られてきた。この独自性をベースに、国が小規模事業者を主役とする方向への施策も生まれていることを共有。現在も別府でユニークな事業者が生まれる文化を持っていることも踏まえながら、小規模事業者の意識革命の起点のひとつ、モデルとなるバックグラウンドを持った街が別府であることの意識とともに、ビジネスプレーヤー同志がつながる機会ともなった。

(2)別府ダイバーシティアカデミア・シンポジウム

別府がダイバーシティ先端都市であることを、その歴史を育んできた温泉旅館・観光関係者や太陽の家関係者、APU 関係者や学生、行政関係者が改めて振り返り、市民とともに、別府市民としての誇りを紡いでいくという主旨のイベントはこれまで行われたことはなかったため、別府市役所も含め、その意義に関して高い価値を認める声も大きく、地方創生の時代に改めて、別府市の持つ特色やアピールポイントを共有することができた。

同時期に、全国温泉サミット的に行われた別府市主催「温泉アカデミア」と並んで、何らかの形で今後も継続をさせるべきであるとの意見も多く聞かれた。

(3)APU ダイバーシティプレゼンテーション

APU の学生によるダイバーシティをテーマとした自主企画として設計した。APU の複数の団体がキャンパスで取り組んでいるディスカッションや活動を、別府市街の中心地で、公開の形で実施する機会は少なく、多国籍の学生による交流や、食も含めたその文化の紹介、そして LGBT 当事者によりマイノリティの問題が話し合われた。ディスカッションには市民の参加もあり、今後もこのような APU 学生と市民の交流・活動の機会があったらいいという考えが共有された意義は大きかった。

(4)卓球バレーエキシビジョンマッチ

本プロジェクトにおける協力団体である「太陽の家」との企画準備において、「かつて障がい者と健常者がともに楽しめる競技を市民イベントとして行っていた」との情報を、関係者に相談したところ、現在では「卓球バレー」がそれに最も近い競技であることの説明を受け、全国大会や世界大会も行われている同競技のデモンストレーションを行うことにしたが、JR 別府駅の快諾もあり、駅コン

コースで実施できたことで、駅を通りがかる国内外の旅行者も足を止め、飛び入り参加者も多数出るなど、理想的な PR の場が実現できた。

(5)温泉国際平和会議

別府に国際大学が生まれたことの意義や理想として語られることが多かった APU の可能性を具現化するイベントとして多国籍の学生によるテーマディスカッションが行われたが、90 か国の留学生が在籍する APU でもキャンパスを離れ、それぞれの国を代表し、その政治スタンス、文化も踏まえ、理想のリーダー論や、国際間問題解決などを話し合う機会は少ない。こうした多国籍の人間による、温泉という場でのディスカッションを容易に実現させることができる APU の特殊性は、別府でしかありえないことを改めて参加者・関係者が理解する場となり、別府が率先してできる、若い世代も含めた国際間問題への提言など、「別府だからこそできること」を認識する場となった。

(6)BEPPU ダイバーシティウォーク

市街地の温泉街に比べて、坂に面し、道の起伏も激しく、それゆえに独特の味わいを持つ鉄輪地区を舞台に、車椅子での参加者、留学生など、さまざまな属性の市民や学生が集って、歴史と街の特色に触れながら、それぞれの視線から改善点を語った本企画は、2020 を迎え、インバウンドが加速していく環境下で、不便を解消するという観点にとどまらず、観光地が活性化し、消費も促進するための視点からもアイデアが出された。また別府市の関係者も参加したが、留学生の多いことが街という強みという自覚がありながらも、国際大学が当たり前に存在するがゆえに、それを具現化する横断的な企画が行われることが少なかったため、今回の企画はその突破口的な企画として意義を認める声が多かった。

留学生からの意見の中には、市街地から観光地である鉄輪までバスで来れることを知らなかった、観光案内はランキング付けすると外国人は周遊しやすい、などプロモーションを改善することで比較的容易に解消されるものもあり、こういった意見が表に出たことは意義があった。

総括

本プロジェクトを通じて、別府市民が自分たちの暮らす「別府」の長所を再確認し、、どのような強化と改善を行っていくべきなのかを考える機会となった。

ポイント 1：外部目線だからこそ実現できた企画

地域の価値を客観的に判断できるのは外部（ヨソモノ）の視線である。そうしたさまざま価値を組み合わせて、浮き彫りにすることは、地域のチカラではできないことが多い。実際、本企画の各プロ

グラムは、さまざまな関係者の意見によると、別府の行政や事業者起点では、このようなキャスティングやプログラムは組みにくいという声もあった。

その面からも、2020 に向けたオリパラの機運醸成と、別府がダイバーシティ先端都市であるという価値を言語化し、市民の誇りを紡ぎだすという次元の大義があったことによって、既成のしがらみを抜きに企画推進が可能となり、別府にとっても画期的な出来事であったと評価されている。

また、プレイベントとして開催したAPUの留学生が温泉に親しむイベントでは、同時期（2016年10月）に話題となった、温泉マークを外国人向けに改編する議論を取り上げた。その中で多くの留学生が「意味があって日本にマークとして存在しているものを外国人のために変えることは、日本文化を損なうことではないか」「それは外国人にも喜ばしいことはない」などの意見が出て、この議論は、別府市や別府の温泉館関係者の中でも大きくクローズアップされることとなった。

ポイント 2：キーパースンの顕在化

今回、企画に関わったメンバーは、行政や観光業・飲食業・教育・福祉・防災などさまざまな分野で、イノベーティブな活動を実践しているキーパースンである。今回の企画により、そういった各分野で展望を持ち、実践できる可能性のある多世代な人材を顕在化できた。また、すでに顕在化している人材同士が業種を越えて結びつく機会とすることができた。

これにより、別府がダイバーシティ先進都市としての誇りを土台にしながら、別府市民を巻き込んだどのような機運醸成と、プログラムが可能か、全国に先駆けて別府が示すことのできるモデルは何かについて考えるプラットフォームを作ることができた。

ポイント 3：別府ができることの意識共有

ダイバーシティをキーワードに別府を分析し、議論の機会を設けたのは、今回が初めてのことである。その根拠となった①中村裕博士が創設した太陽の家での障がい者雇用や、②同博士の障がい者スポーツのパイオニアとしての役割、③太陽の家の存在が自然に市民と障がい者との自然な距離や所作を生み出していること、④APU 開学により 90 か国の留学生が、17 年の時を紡いで、市民と外国人が待在あったという事実は、市民にとって当たり前の事実であり、風景であるが、今回改めて、そうした事実が別府の突出した特色であり、2020 以降の日本が目指していくべき人の共生モデルであることを提示した。

そうした意識の共有は、今後市民の誇りとして反映されていくだけでなく、なぜ別府がこうしたダイバーシティ都市としての歩みを重ねたのか、さらに進化できることとは何か、それを総括することによって、ダイバーシティを掲げる国内の地域にも、知見を提供するなど、別府の使命を考えていく

最初の機会になったと考えている。

課題

当該事業により明らかとなった課題について、参画・協力していただいた機関に着目して整理すると以下の点があげられる。

●わかりやすさの追求

今回の別府ダイバーシティアカデミアの意義は、今回の企画に携わったキーパースンや企業・団体に共有された。今回の事業参加者はダイバーシティの価値に対する世界的潮流や価値を比較的理解していた。しかしながら今後はダイバーシティという言葉に触れることの少ない層にも、訴求していく必要がある。その意味では、今回の試みで得られた知見や価値、意義をわかりやすいテキストやキーワードにし、より市民に浸透させていくことが重要であると感じられた。

●行政連携

今回のプロジェクトは、行政主導型ではなく、別府のダイバーシティをつくりあげているステークホルダーがその意義を感じて連携し、推進させた。一方、2016 年は別府市役所が初めての試みとして、全国の温泉地が別府に一堂に会して、温泉産業の可能性や施策、効能についての科学的アプローチや海外事例に学び、交流を行う「ONSEN アカデミア」が同じく 11 月に初めて実施された。それぞれ異なるアプローチで別府をテーマとしたことで、スピンアウト企画としての位置づけになり、同じ時期にも関わらず、最終的に別府市の協力や市長・副市長の登壇など、当初以上に緊密な連携が可能となった。今後は企画段階からの有機的な連携を図っていくことを双方で確認している。

温泉地という強みをさらに活かし、ダイバーシティを推進していくための政策も進めていく必要がある。本プロジェクトにて、車いす使用者でも足湯が楽しめるようにするための施設拡充を求める意見があった。また、別府市としてLGBT でも温泉を楽しめるよう検討を進めているとの話題もあった。こういった案を市民から吸い上げ、そして実現していく、市民と行政の連携が重要である。

●市民の巻き込み

わかりやすさの課題のところでも記したが、ダイバーシティの価値をわかりやすく表現し、それにひもづいたテーマ設定での、市民主導によるシンポジウムや、ワークショップなどを草の根レベルで実現させていくことが今後は重要である。

●教育機関

今回は教育機関の連携は大学のみであったが、ダイバーシティ教育や、ダイバーシティ先進都

市が別府であることへの気づきを創出することは、今後の別府に有用な人材を輩出していく上では重要であり、特に中学、高校などの若い人材の巻き込みが重要である。

別府が生んだパラリンピック生みの親である中村裕博士や、太陽の家の歩みなどは、現在の別府市民に浸透しているとは言えない。2020 に向けては、こうした若い人材が別府プライドとともに、先頭に立って機運醸成を行うことが必要と考える。

●県外との連携

ダイバーシティへの意義への理解が基本的に通底する県外の自治体との連携によってそれぞれの考えや、環境、人的リソースによって異なる施策なども比較しながら、ダイバーシティの先頭ランナーとの連携で、市民意識を醸成していくことも検討していきたい。

そのためにはリーダーシップをもって定期的に企画できる存在の育成が必要となる。よそ者の寛容性は優れているものの、地元の人間をまとめ、2020 年に向けて導いていくには責任を担える人材が必要である。

将来計画

以下に示す課題を踏まえた将来計画（提案）は、当該採択プロジェクトの実施経験を踏まえたものである。

2017 年

□2016 年実施の総括
■主要メンバーによるディスカッション
■別府ダイバーシティ推進への仮説・戦術構築
■行政連携・教育連携・ダイバーシティ関連団体との連携体制の充足
■実施体制の構築
■イベントの実施

2018 年

□2017 年実施の総括
■2020 に向けたダイバーシティ推進のシナリオづくり
■2019 年ラグビーW 杯（大分会場実施含）に向けた啓蒙イベント・キャンペーン構築
■「別府ダイバーシティ都市宣言」　宣言文　アクションプログラム
■県外・国外連携模索
■小中高向けダイバーシティ教育プログラムの実験的構築
■市民向け「ダイバーシティブック」の発刊

2019 年

□2018 年実施の総括
■「別府ダイバーシティ都市宣言」に基づくアクション
■2019 年ラグビーW 杯での啓蒙イベント・キャンペーン実施
■2020 における別府ダイバーシティイベント準備

2020 年

□2019 年実施の総括
■「別府ダイバーシティ都市宣言」に基づくアクション
■2020 東京オリンピック・パラリンピックと連動した別府市民発イベント
■ムーブメントの形成

2021 年

□2020 年実施の総括

2021 年以降「別府ダイバーシティ都市宣言」に基づくアクションの継続

以上

障害者の優れた芸術作品による文化創造プロジェクト

社会福祉法人愛成会

実施団体	社会福祉法人愛成会
実施時期	2016 年 11 月～2017 年 2 月
場　所	東京都
概　要	中野地域商店街と連携し、街中空間を活用して、障害者の優れた芸術作品を用いた国際的なアール・ブリュット展の開催や多様な表現に触れることのできるステージイベント等を実施。このような取り組みから人と人が出会い他者理解を深め、共生社会の実現につなげる。
効果検証方法	・街中空間を利用して作品を展示することにより、普段芸術作品と触れる機会のない人が芸術文化と出合う場面が増える ・障害者が制作する芸術作品のなかでも芸術性の優れた作品を展示することにより、障害者に対する認識の変化や、障害の理解、他者理解へとつながり、ひいては協働の街づくりの新しいモデルとなる ・来場者や関係者等へのインタビュー／アンケートにより効果を評価

試行プロジェクトの概要

実施目的

障害者の優れた芸術作品を用いた国際的なアール・ブリュット展の開催や多様な表現に触れることのできるステージイベント等を実施する。全ての取り組みを地域関係者との連携のもと、街全体の取り組みとして実施することで、街を利用する不特定多数の方を対象としたイベント実施が可能となる。本事業は、このような地域社会との連携によって生まれる効果を活かし、障害の有無や性別、年齢、国籍に関わらず多様な人の出会いや交流の場を地域の中で展開し、人と人との交流を通じた相互理解を育む機会として、共生社会の実現に寄与するものとして実施する。

実施概要

① 実行委員会の開催（2016 年 10 月から 2017 年 2 月にかけて三回実施）
② 作品調査及びアール・ブリュット国際フォーラムの打ち合わせ（中国、タイ）
③ 障害者の幅広い表現を展示する大規模なアール・ブリュット展の開催（東京都中野区の公共施設および街なか、東京都港区の国立新美術館）
④ 障害者の創作活動に関する国際フォーラム・パフォーマンスの開催（東京都中野区）
⑤ 報告書の作成
⑥ 広報活動（2016 年 11 月上旬～2 月上旬）

取組み内容

1. 実行委員会の開催

全 3 回の実行委員会を開催した。委員として地域商店街の方をはじめさまざまな分野の方に参加いただき、地域・社会に向けた幅広い事業の周知を行った。また、委員との相談をもとに事業実施における意思決定、課題の把握、調整、検討及び進捗管理を委行うことで、より円滑な事業実施と質の向上に努めた。

実行委員会では、展示内容や、外国人や障害のある鑑賞者への対応をどのようにするか、開催地近隣の施設の協力模索、伝統芸能や既存の文化芸術を含む来年度の展開に向けた意見交換を行った。

2. 作品調査及びアール・ブリュット国際フォーラムの打ち合わせ

中国

①【上海】WABC

ステージパフォーマンスやマラソン等、多数のイベントを開催する団体で、絵画が得意な障害者向けのアトリエを訪問した。思いのままに創作する時間とあわせて、画材の使い方や立体感覚を醸成するための講義も行っている。また、作品を利用した商品開発や複製画の販売なども活発に行っている。

【上海】コレクター宅

美術関連の書籍を出版する出版社の副社長であり、アーティストでもある張 天志氏のアトリエを訪ね、自身がコレクションする 3 名の作家の作品を見せていただいた。大型の作品が多かったため、今回は、持ち帰りが可能な小型の作品のみ借用した。借用がかなわなかった大型の作品は、中野南口駅前商店街に展示するバナー用として作品画像をお借りした。

【南京】南京社区原生芸術スタジオ

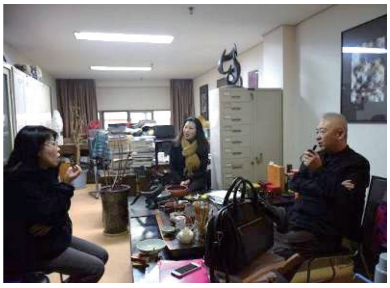
南京市内に住む障害のある方を中心として、精神障害、知的障害などの障害種別や年齢を問わず約 30 名が在籍する創作スタジオを訪問した。20 代 30 代の利用者が大半を占めるほか、未成年者も数名在籍している。

ここでは、日本での出展作品をお借りしたほか、代表である郭海平（グオ・ハイピン）氏への国際フォーラムでの登壇依頼と講演内容について打ち合わせを行った。

【河南省】美術家 郭景涵氏 アトリエ

中国の国家一級美術師であり、彫塑家として活躍されている郭景涵氏の事務所を訪問し、2010 年に郭氏がキュレーターを務めた九連山帳簿（ジウリエンシャンジャンシュー）展の展示作品についてお話を伺った。河南省新郷市の農村で行われる「帳簿」という儀礼は全 4 段階あり、特定の方々が突如、天命を受けて文

字様の記号や図柄をしたため、祈願を成就させるために重陽節（旧暦の 9 月 9 日）にそれらを読み上げた後、全てを焼却することをもって完結する。作品は天から知らせが降りてきた時のみ描かれ、重陽節までその地域で保管されることから、訪問時は現物を拝見することや作品の借用には至らなかった。



② 【北京】Tabula Rasa Gallery

2015 年から「ART SU」というアマチュアアート展を開催しているギャラリーを訪問した。ART SU は 2015 年と 2016 年に北京市内で開催され、展示はアール・ブリュット、アニメ・コミック、アマチュアアートという 3 つのジャンルに分けて構成されている。Tabula Rasa Gallery では、経営者の刘亦嫄氏が「Almost Art Project」として自己財源による作家の発掘から作品保管、エージェントまでを無償で請負い、アマチュア・アーティストの活動を支援している。これにより、高齢者や低所得層の作家など幅広い方が社会へとつながる機会が作られている。大きな作品が多く、持ち帰りが困難であったため、画像をお借りしてバナーでの展示を行った。

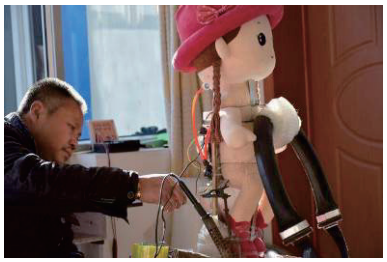
③【北京】長征空間

中国の現代アーティストとして活躍した作家、郭凤怡氏の作品を保管する美術館を訪問した。ヴェネチア・ビエンナーレへの出展で、現代アートとして認められ始め、アール・ブリュット作品として出すことに抵抗を示されたため、今回は借用を諦めた。

④【北京】罗铮(ロ・チェン)氏　アトリエ兼自宅

これまでに個展の開催や東京藝術大学とのコラボレーション等、幅広く活躍する作家の自宅兼アトリエを訪問した。音楽にインスピレーションを得て描く彼の作品は、音階やリズムを視覚化させた、踊るような描写で描かれた色彩豊かなものが多く、自宅で大切に保管されていた。作品が大型であり、事前の調整も不十分であったため、借用には至らなかった。

⑤【北京】吴 玉禄(ウー・ユールー)氏アトリエ兼自宅



元々は趣味で始めたロボット作りであったが、現在では研究所などから制作の依頼を受けることもある。これまで、新聞や各種メディアにも数多く取り上げられ、以前、京都でロボットが展示された経験もある。制作したロボットを拝見し、制作風景も見学させていただいた。持ち帰りが困難なため、今回は借用をしていない。写真は制作中の様子。

タイ

① ジュンポン・チナプラパート氏のスタジオ訪問

タイへの訪問時期が展覧会の直前であったため、現地で絵画療法のスタジオを開室するジュンポン氏に事前に調査いただき、同氏が挙げた10名の現地作家の候補から、日本での出展作品を選定した。また、「アール・ブリュット国際フォーラム＆パフォーマンス」で、日頃の取り組みについて発表していただくためにお話を伺うなど、講演の事前打ち合わせも行った。

② レインボールーム訪問

障害のある方々のご家族がタイ・バンコクに設立したレインボールームという財団を訪問した。レインボールームは、現地にて障害者の相談窓口としての機能を担うほか、障害のある方々とともに取り組むアートイベントやチャリティマラソンなどを開催している。

団体の代表であるロザリーナ・アレキサンダー氏にタイでの障害者福祉の現状や創作活動の取り組みなどについてお話を伺った。また、団体が持つ幅広いネットワークを活かし、今後のタイにおける発掘調査をどのように展開することが可能であるかについて意見交換を行った。

まとめ

【中国】

今回、中国の北方地域（上海以北）の団体や個人を訪問し、数多くの作品・作家と出会うことができた。中国では、過去 2 年の間にアール・ブリュット（原生芸術）という呼称と、関連する活動への注目が急速に高まりつつあり、政府がアトリエを提供したり展覧会を経済的に支援したりするケースも出てきている。作品の二次利用による商品展開や低所得者や高齢者を含むアマチュア・アーティストを発掘・支援する取り組みも見られた。

深刻な経済格差が存在する中国において、創作を通じて障害のある方々、低所得者、高齢者といった社会の周縁にいる方々が社会とつながり、活躍する場がつくられる様子を今回の訪問の中で見ることができた。今後、東京オリパラ大会に向けてアジア圏の作家層を厚くしていく上でも、今回の訪問先と継続的に連携しつつ、他の地域を開拓していけるような体制を築いていくことが重要だと考えている。

【タイ】

仏教国として知られるタイでは、日々の生活に密着する形で、いたるところに仏教美術があふれている。また、小中学校の義務教育期間中には美術の時間が設けられており、絵を描く、物をつくるといった表現はタイの人にとって身近なこととして根付いている。

しかし、障害者の創作活動や、どのジャンルにも属さないような独自性のある作品が表に出る機会はほとんどない。それはアール・ブリュットという概念自体がなく、正規の美術教育を受けてない人の作品が「価値ある芸術」として扱われていないからではないかと考えられる。今回の調査発掘

では、タイの美術関係者や福祉関係者に、そのような視点を持ってもらうことに注力した。今回訪問したジュンポン氏のスタジオやレインボールーム財団との繋がりはその第一歩であり、次年度以降の作品の発掘につながると感じている。

3. 障害者の幅広い表現を展示する大規模なアール・ブリュット展

【アール・ブリュット―人の無限の想像力を探求する 2017―の開催】

街中アール・ブリュット展

【会場 1～3】

1. 中野サンモール商店街　空中ギャラリー／毎日の平均通行者数:約 5 万人
2. 中野ブロードウェイ商店街　階段ギャラリー／毎日の平均通行者数:平日　2~2.5 万人　土日祝　5 万人強
3. 中野南口駅前商店街　看板ギャラリー／毎日の平均通行者数:　約 2 万人

中野駅北口を出て目の前にある中野サンモール商店街の中に縦 1.8×横 3 メートルの大型作品バナーを 8 枚設置した。中野サンプラザと国立新美術館に展示している作家から 14 名の作品画像が、続く中野ブロードウェイ商店街へと誘導した。ここでは、階段沿いにパネルを設置し、2017 年にフランスのナント市にて開催する日本のアール・ブリュット展への出展候補作家の作品やナント市の文化に関する取り組みなどについて紹介したほか、1F の北側入り口付近では、古賀翔一さんの作品展示を行った。

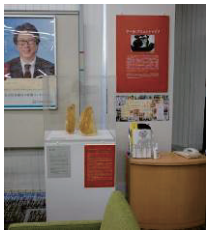
駅の反対側となる南口から大久保通りへと繋がる中野南口駅前商店街では、中国、タイのアール・ブリュット作品のバナー23 枚を展示した。こちらの会場では、商店街の方々の手でバナー設置が行われている。

【会場 4･5】

4. 三井住友信託銀行　中野支店　ロビー展示／
出展作家:　石野　敬祐　(2 月 3 日まで)梅木　鉄平　(2 月 6 日から)

5. 西武信用金庫　本店　ロビー展示／出展作家:澤田　真一

中野駅の北口すぐのところにある銀行のロビーでは、この時期に限らず常時作品展示を行い、2か月に一度新たな作品を紹介している。また、中野駅の南口の『西武信用金庫　本店』では、昨年から引き続き、銀行のロビーにて作品展示を行った。



【会場 6】

中野サンプラザ　1F ロビー

来場者数:　1,160 名／展示作品:74 点／出展作家:10 名

【日本作家 7 名】木村　茜、木村　全彦、久保田　洋子、古賀　翔一、澤田　真一、清水　ちはる、戸谷　誠

【中国作家 3 名】李昌胜(リー･チャンション)、凤英(フォンイン)、小燕子(シアオイエンズ)

中野のシンボル的な建物である「中野サンプラザ」の 1 階ロビーに設けた展示会場では、中国と日本の作家 10 名の作品を展示した。

【会場 7】

国立新美術館　企画展示室 1E

来場者数:8,672 名(内、外国人 693 名)／展示作品:60 点／出展作家:14 名

【日本作家 11 名】伊藤　広哲、梅木　鉄平、岡崎　莉望、齋藤　勝利、澤田　真一、鮏　万里絵、辻　勇二、戸谷　誠、中島　涼介、濱脇　忍、本岡　秀則

【中国作家 2 名】健健(ジェンジェン)、乔雨龙(チャオ･ユーロン)／【タイ作家 1 名】Pichaya(ピッチャー･) Lertsapcharoen(ラーサップチャーラーン)

新国立美術館での作品展示は、港区が開催する区内の障害者美術展の会場内にて実施した。開館 10 周年を迎えた美術館では、記念イベントなどを目的に来られた方が多く、本会場にも知らずに入ってこられる姿が見られた。じっくりと時間をかけて鑑賞される方が多かった。

【会場 8】
いちばん身近な美術展
アール・ブリュット de 街おこし展 2016
場所:野方 WIZ　2F ギャラリー／出展作家:9 名
池田　真悟、小津　誠、澤田　真一、鮏　万里絵、高橋　和彦、辻　勇二、藤岡　祐機、
戸次　公明、山崎　健一
西武新宿線野方駅近くにある区民活動センターのギャラリーにて展示を行った。
会場内では 1 月～2 月で開催する中野駅周辺でのイベントの告知を入れた展覧会チラシを配布した。また、会場がある野方商店街では、それぞれ異なるアール・ブリュット作品のポスターを約 70 店舗に掲示し、スタンプラリーを開催する「ストリートギャラリー展」が商店街有志によって同時開催された。

4.　障害者の創作活動に関する国際フォーラム・パフォーマンス
2011 年から毎年開催しているアール・ブリュットフォーラムに、福祉施設から誕生したロックバンド、能とアール・ブリュットのコラボレーションなど、パフォーマンスの演目を加えて内容の充実をはかったほか、国外における取り組みについて、中国・タイで障害のある方々の創作活動をサポートする専門家等に登壇いただき、国内外の情報収集の場として開催した。約 180 人が参加した。

5.　広報活動
各展覧会のチラシ 3 種類（合計約 10, 000 部）を 2016 年 10 月から 2 月にかけて順次作成、新聞折り込みチラシ、郵送、会場施設や関連団体への配布、街中で配るなどの方法で配布した。
また、Facebook ページ「アール・ブリュット Nakano」で 10 回投稿を行い、Twitter にも連動して同回数を発信した。野方に関する投稿 2 回、これらに対するリーチは 3,756 人、いいね！は 161 クリック、中野駅周辺での開催に関する投稿は 8 回実施し、リーチ 31,444 人、いいね！786 人であった。

効果と課題
効果
現在、東京都では 2020 年に開催するオリパラ大会に向けて、アール・ブリュットや障害者のアート作品の普及に向けた動きが活発化している。この機運をさらに高めるべく、昨年、都では渋谷区にアール・ブリュット作品の常設展示場所を設けることが決定している。今後、アール・ブリュットがさらに浸透し、理解を深めていく上では、都内において多角的な視点による展示機会を設け、あらゆる層に向けたアプローチが大切であると考えている。

作品展示、フォーラム・パフォーマンスイベント
今回の開催では中野駅周辺の会場での展示を中心に、野方でのプレ展示、国立新美術館での広報を兼ねた展示など、全 3 会場で開催し、延べ1万人を超える方々に日本と中国、タイのアー

ル・ブリュット作品をご覧いただく機会となった。

国内の作品とあわせて、中野南口駅前商店街では中国やタイの作品を展示し、「色が明るい作品が多く商店街の雰囲気が明るくなった」との意見をいただいた。

中野には、数多くの飲食店が並び、中国をはじめアジア系の外国人が集っている。今回の展示では、それぞれの国の作品を通じて、その国の文化を感じる機会に繋がったのではないかと思う。

また、「国際フォーラム＆パフォーマンス」イベントでは、最新技術を用いて伝統芸能である「能」と「アール・ブリュット」のコラボレーションを行い、互いの文化の新しい形を実現することができた。

アンケートのコメントには、障害について考えたことを書かれる方も多く、「出展者たちのセンスが気持ちよいくらい表出されているのを見られて感動した。」「障がいという言葉は似つかわしくないように思える。異才というべきか。アーティストの方々の今後の作品も観続けたいと思った。」など、作品との出会いから、作家の持つ障害そのものではなく、その才能や持っている力に感化されたコメントが多く残されている。これらのコメントからは、差別的、排他的雰囲気はなく、親近感や好感、もっと知りたいといった欲求が感じられる。

このように場所や見せ方、他の何かとの融合により、より広い層の方が作品の魅力に触れることとなり、作品の素晴らしさとともに、障害や多様な人の存在についても認識する機会となったのではないかと考えられる。

海外への発信、外国人への対応について

今回、国立新美術館での展示で来場された外国の方の人数をカウントしたところ、約 700 名（※）の方が訪れている。これに対し、常時ではないが、外国語ができるスタッフが対応する日を数日設け、作品や企画についての説明などの対応を行った。

※ 会場スタッフが外国人と識別できる範囲でのカウントのため、正確には表記よりも多くの外国人が来場されたと推測している。

インターネットを活用した情報発信

普段から情報発信用に活用している Facebook、ツイッターでの発信のほか、イベント用のホームページを立ち上げ広報を行った。また、英語表記のページも設け、海外の方への発信に努めた。

ホームページからはフォーラム参加申し込みが 20 件ほど寄せられた。

連携団体への効果

展示場所である西武信用金庫や三井住友信託銀行中野支店からは、イベント期間中、普段の利用客以外にも作品を観にお客さんが来られたとの報告を受けたほか、ブロードウェイのようにインフォメーションがある商店街では来街者から展示の場所などについての質問が年々増加傾向にあり、イベントを目的とした来街者の増加とそれを目的としない方も街の中での作品との出合いを楽しまれている様子であるとの報告をいただいた。

普段から人通りの多い商店街であるため、売り上げ増や来客数のアップなどは厳密に測定するこ

とは難しく、商店街の方には上記のような認識がある程度である。

地元商店街、学校、企業との連携

事業実施にあたり、普段より協力体制にある中野区の商店街や学校、NPO 法人などと実行委員会を組織したほか、地元企業の方に多方面からご協力いただいた。その結果、得られた効果には以下のようなことが挙げられる。

① **会場の提供**／展示場所として各商店街のギャラリースペースを無償にて借用した。今年は、地元企業の方のご協力により、明治大学のホールを優先的にお貸しいただいた。また、各商店街の協力により区内の商店街全 4 ヶ所を展示スペースとして無償で提供いただくとともに中野サンプラザのロビー借用に関する交渉など全般を協力いただき、作品展示が可能となった。

② **実施内容の充実**／今年度は地元企業の方々に地域の資源を生かした事業の充実に向けたご提案をいただき、国際フォーラム&パフォーマンスイベントでの能×アール・ブリュットの実現につながった。商店街の方からは各会場での展示について会場の特性などアドバイスをいただきながら展示物などの仕様に反映し、作品や告知のより効果的な打ちだしにつながった。

③ **広報の充実**／各商店街や団体の会議又は集会での告知やポスター掲示の呼びかけ、チラシの配布などを委員に担っていただいた。

課題

【展示に関すること】

- 展示場所は、外国の方が多く利用される場所であった。案内や紹介キャプションを多言語化し、鑑賞者が作品や作者について知り、理解を深める機会に繋げたい。
- 会場の広さの問題から、個々の作家の魅力を十分に伝えることが困難であった。狭いことで観覧途中の思わぬ事故による作品損傷なども考えられるため、もう少し広いスペースを確保したい。
- 簡易なものでも展示カタログを作成し、配布することによって口コミでの広がりにつなげていくことが出来るのではないかと感じた。
- 会場の広さの問題から車いすの鑑賞者がゆったりと作品を鑑賞いただけるほどの空間確保ができていなかったため、次回の実施では広いスペースの確保が必要。

【広報に関すること】

- アンケートの中でも「もっと広報をしたほうがよい」「知らなかった」というコメントが多くみられている。街全体を挙げての取り組みであるため、駅や商店への働きかけによるチラシやポスターの設置ヵ所拡大が必要。
- ラジオ・新聞でも取り上げてもらえるようにプレスリリースの徹底が必要。

- HP を早い段階から作成し、前年度の開催内容をまとめた動画配信など、一般の人の興味を引く告知を行い参加人数の拡大に繋げる工夫が必要。

【イベント全体に関すること】

- 委託事業の契約完了から 4 ヶ月間で全ての企画を実施し、報告まで終える必要があったため、事業実施に向けての準備が不十分であった。
- 今後、展示場所や工法の協力などにおいて行政関係からの協力を得られるよう日頃から情報の共有や連携体制の構築が必要。
- Web アンケートでの意見の収集結果が思ったように伸びなかった。また、回答をいただいた方から入力のし辛さについての指摘もいただいており、次回 Web アンケートを設ける際には改善に繋げたい。今回、アンケートを事業の初めから設置するなど件数アップに向けた改善が必要である。

【各会場でのアンケートから上げられる課題】

全体的に「会場が狭い」「展示の機会を増やしてほしい」などの項目が課題として多く挙げられた。今回の展示では、計画当初に予定をしていた展示ギャラリーが改装中のため、使用できず十分な展示スペースが確保できなかったため、非常に狭い空間での展示となった。中野駅周辺で展示に使用できる十分なスペースを確保するには膨大な予算を要してしまうため、区が運営するギャラリーなどが開催時期に合わせて借りられるように各方面への働きかけが必要である。

国立新美術館では、8,000 人を超える方にご来場いただき、アール・ブリュットを知らない方に観ていただく絶好の機会となった。しかし、継続的に使用できる場ではないため、今後代替え案となるような場所を模索していく必要がある。また、両会場ともにゆっくりと時間をかけて鑑賞される方々が多く、そういった方により鑑賞を楽しんでいただけるように作家の詳しい紹介の音声ガイダンスなどを用意していきたい。

商店街や実行委員からの意見としては、広報について強化が必要との声が多く上がった。具体案としては、中野区の商店街連合会で全商店街へのポスター配布と各商店街の会合でのポスターの配布を徹底し、地域住民への告知を強化することができるのではとのことであった。

将来計画

１． 街×アール・ブリュットの普及推進

街とアール・ブリュットの発信に取り組んで、今年度で 8 年目を迎えた。

日常的に利用する駅や商店街にアール・ブリュット作品が展示されることにより、幅広い人々に周知し、作品を知ってもらうきっかけになっている。例えば、中野サンプラザのロビーでの展示では、サンプラザのコンサートに訪れた高齢者が足を止め、感動を声にする姿も見られた。

当初は「アール・ブリュット」という言葉も伝わらなかったところから、商店街の人々や地域住民との強いつながりを作り、今では地域の人たちに毎年の開催を心待ちにされるまでに成長した。芸術、福祉、そして街全体が一体となった芸術文化の発信事業は世界的にも珍しく、今年度はイギリスか

らも視察があった。他国からも注目を集めている本事業の取り組みは、国内だけでなく、海外のモデルケースにもなることができる。

この 8 年間で培ったスキルを活かし、今後は全国に「街×アール・ブリュット」のモデルとして普及、展開していくことを目指したい。中野をハブとして、地方自治体から依頼があった場合、本事業で培ったノウハウの提供や街中での展示で使用している作品バナーやポスターパネルの貸し出しなどを行っていきたい。地方自治体にとって、貸し出しのコンテンツを利用することで取り組みが始めやすいため、全国各地への普及効果も期待できると考える。また国内のさまざまな箇所で展開していくことでネットワークの構築にもつながるとともに、2020 年のオリパラ大会に向けて全国的な機運を高めていくことにつながっていく。全国展開のほかに、次年度以降は、さらに下記の点に注力していきたい。

（1）地域のボランティアとの連携と、そのための人材育成

例えば、地元在住の高齢者には街の歴史を語ってもらう、外国籍住民には多言語での案内、学生には展覧会でのイベントの手伝いなど、地域に暮らす幅広い層の方々との協働で、本事業を展開させていくことは、事業自体の充実につながるとともに、高齢者や外国人などにとっては芸術文化を通じた地域での「居場所作り」につなげることができるのではないだろうか。今後は、このようなボランティアの方を地域の中で募るとともに、必要な知識を身につけていただけるような人材育成も合わせて行っていきたい。

（2）さらなる集客と SNS の活用

「商店街の展示」及び「アール・ブリュット展」は非常に多くの方にご覧いただき、好評を得ることができた。しかし「国際フォーラム＆パフォーマンス」イベントは、講演、多彩なゲスト、パフォーマンスと内容の充実に対して来客が少なかったといえる。アンケート結果からは来客の満足度が高いことがうかがえる。そのため、今後は以下の 2 点を徹底し幅広い周知に繋げていきたい。

① 早い段階でプレス発信を行い、新聞などのメディアへの事前記事の掲載につながるよう、継続的なアプローチを行う。

② SNS を活用し、アートに関心が高い層に向けて年間を通した継続的な PR を行う。

（3）他の芸術分野などとのコラボレーション

今年度の事業では、伝統芸能である「能」と「アール・ブリュット」そして「大学との連携」により能面を 3D プリンターで作成する最新のテクノロジー との見事なコラボレーションが実現した。異なる分野同士が交わり、新しいコレボレーションによる表現の可能性を探求する機会は未来への新しい芸術の形や展開、つながりを作っていくものであり、次年度もさらに発展させていきたい。

2. 展示スペースの確保

これまでのアール・ブリュットの展覧会では、来場者の大半は40歳以上で、29歳以下の若年層は

全体の 10%に満たないことが多かった。しかし今回の国立新美術館での展示では、29 歳以下の若年層が全体の 30%を超え、会場では若い世代が熱心に作品を鑑賞する姿が多く見られた。その他、外国人の観覧者の姿も目立った。

アール・ブリュット作品は、幅広い世代が親しむことができる芸術であるが、展示場所によっては観覧者の層に偏りがみられる。さまざまな世代の人がアール・ブリュットに親しむことができるように、展示スペースの確保は重要な課題である。特に若い世代が集まる場所での展示機会の拡大は急務といえよう。

また、鑑賞者が安心して作品を楽しめる程度の最低限の展示空間の確保も重要と考えている。しかし、民間の社会福祉法人では借りられる会場に限界があるため、今後の展示スペースの確保には、行政の協力と理解が不可欠である。

また、多様な作家がいるアール・ブリュットという芸術分野の特性を活かし、多様性の発信も行っていきたい。日本のアール・ブリュット作家には障害がある人が多く含まれているが、障害者だけでなく、女性、外国籍住民、LGBT など、社会的弱者とされるさまざまな方の存在を知り、感じる機会とし「すでに一緒に生きている」ことや「ちがいはチカラになる」ことを、言葉を超えて体感してもらえるような、イベント展開を考えている。

3. 国際的な視点

本事業では初のアジアのアール・ブリュット作品の展示を行った。

展示作家数は決して多くなかったが、アンケート上では中国の作品を評価するコメントが見られた。日本では近年、アジア圏の外国人旅行者の急増に加え、在住者も年々増加している中で、今後も継続して作品の調査発掘、国内での発信に取り組むことは、互いの国の異なる文化や風土に興味を持ち、理解を深める機会になると考えている。

また当法人は、2011 年よりヨーロッパでの巡回展の事務局を務めてきた。2017 年 10 月にはフランス・ナント市で大規模な芸術文化の交流事業の開催が決定している。その他にもパリ、スウェーデンで日本のアール・ブリュット作品展が今後開催される予定である。芸術文化とまちづくりの本事業の取り組みは、国外の関係団体からの評価や関心も高い。これまでの継続的な文化交流の結果育まれた強力な国際ネットワークを活かし、3 年後に控えた東京オリパラ大会にもつなげていくために、多言語で日本の芸術文化活動が伝えられるようなウェブサイトを作成し発信していきたいと考える。

「ダイバーシティ」という言葉だけ聞いても、普段関わりを持つことが少ない多様な人々を理解することは難しいかもしれない。しかし、今年度の事業を通して、芸術文化を通じたまちづくりが人々の心の交流を自然と促すことが強く感じられた。

今年度の今事業での成果、そして見えてきた課題を解決していくことで、障害のある人もない人も活躍できる、多様性のある社会の実現を目指していきたい。

以上

誰もが楽しめる自由な芸術祭ユニバーサルアートフェスティバルinすみだ
株式会社中日新聞社

実施団体	中日新聞社　(HEART & DESIGN FOR ALL)
実施時期	2017 年 2 月
場　所	東京都
概　要	日本国内外で活躍する障がいを持つ文化人の保護者による講演会をはじめ、文化・芸術面で活動する障がい者団体の取り組みを紹介する展示等、幅広い層に対して文化活動を体験する機会を設けるイベントを実施。これらを新聞紙面などで情報発信をすることで文化活動の更なる活性化や心のバリアフリー推進を図る。パラリンピック開催に向けてユニバーサルマナーの知識を習得したボランティアの育成の強化にも努めていく。
効果検証方法	イベント来場者に対するアンケート調査および新聞の読者アンケート調査（イベント告知前と後の比較）を実施する。

試行プロジェクトの概要

実施目的

訪日観光客が増え続けるなか、日本国内では世界に類を見ない超高齢化社会が着実に進行しており、現在、高齢者は日本人口の約 27%の 3400 万人、また障がい者は約 6%の 788 万人となっている。2020 東京オリンピック・パラリンピックを控え、海外からより多くの高齢者、障がい者の方が訪日すると予想される。

中日新聞社では東京本社を中心に、これらの背景を踏まえて、2015 年 9 月に株式会社ミライロと誰もが暮らしやすい社会の実現に向けて「HEART & DESIGN FOR ALL」という取り組みを開始した。現在の日本においてはハード面でのユニバーサルデザイン化が他の国よりも進んでいるが、心(Heart)の面でのバリアフリーは依然課題である。

本イベントでは、幅広い層に向けて、現在の日本での障がい者による文化・芸術的活動の現状を知らせることをはじめ、親子を中心に体験や講演会を通じて、文化教育について考えるきっかけを作り、今後の文化・芸術的活動の更なる普及・浸透に努めると共に、文化活動を通じて心のバリアフリー推進を図ることを目指す。

取組み内容

＜イベント概要＞

タイトル:誰もが楽しめる自由な芸術祭 ユニバーサルアートフェスティバル in すみだ

実施日時:2017 年 2 月 4 日(土)11:00 ～ 16:00

2017 年 2 月 5 日(日)10:30 ～ 16:00

会場　:墨田区立両国中学校 格技場(墨田区横綱 1-8-1)

特別講演　2月4日(土) 11:30〜12:30

子どもの才能の見つけ方、伸ばし方

講師:辻井 いつ子さん

日本が世界に誇るピアニスト伸行さんを育てた経験をもとに、「子どもの可能性を信じる」「思いっきりほめる、抱きしめる」「ひらめいたら即アクション」など、子どもの才能を引き出す法則についてお聞きします。「子どもの才能を伸ばすための、習い事や先生の見つけ方」など、教育者や親御さんにとって関心の高い内容もお話しいただきます。

(PROFILE) ピアニストと井伸行氏の母。ラジオパーソナリティ。伸行氏が生後間もなく全盲とわかる。絶望のなか手探りで子育てをスタート。常に子どもの可能性を信じ、プロのピアニストへと二人三脚で歩む。その結果、伸行氏は2009年アメリカで開催されたヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで日本人初の優勝を果たす。

トークショー　2月4日(土) 14:15〜15:00

スポーツの魅力、夢見るチカラ

出演:三宅(ウエイトリフティング選手) 宏実さん × マクドナルド・山本(パラ・パワーリフティング選手) 恵理さん

昨年のリオ五輪、重量挙げ、女子48kg級で銅メダルを獲得した三宅宏実さんと、昨年パラ・パワーリフティングを始め2020年東京パラリンピック出場を目指す、マクドナルド・山本恵理さんが初対面。同じ競技を通して、共通する点、異なる点、2020年に向けて抱く夢や目標について語り合います。

三宅 宏実さん

ウエイトリフティング選手。1985年、埼玉県生まれ。法政大学卒。いちご株式会社勤務。アテネ、北京、ロンドン、リオデジャネイロと4大会連続五輪出場。ロンドンで銅、リオで銅メダル獲得。

マクドナルド・山本恵理さん

アスリートネーム「パワーマック」。パワーリフターとして東京2020パラリンピック出場を目指す。日本財団パラリンピックサポートセンター(パラサポ)勤務。

スペシャルLIVE　2月5日(日) 11:00〜11:50

こころの目を開いて、明日を歌う

出演:佐藤 ひらりさん

おもちゃのピアノで美空ひばりさんの「川の流れのように」を弾いたのは5歳のとき。9歳のときに初めてのオリジナル曲「みらい」を作詞・作曲。東日本大震災の避難所での慰問コンサートなど、県内外で年間約50本の演奏活動を行うひらりさんの歌声をライブでお届けします。みなさんの知ってる曲も演奏予定、ぜひ一緒に歌ってください。

(PROFILE) 2001年新潟県生まれ。聴神経低形成による全盲。10年ゴールド・コンサート新潟・演奏賞および観客賞、12年グランプリおよび観客賞受賞。13年NYアポロシアター「アマチュア・ナイト」ウィークリーチャンピオン。14年全国CDデビュー。

出展団体紹介

ステージ・ワークショップ

株式会社漫画家学会

漫画家と紙芝居師100名の集団「渋谷画劇団」は、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会公認団体。「紙芝居」を通して、誰もが一緒に暮らせる社会を目指し活動中。紙芝居の口演と紙芝居作りのワークショップを開催します。

ステージ・ワークショップ・展示

口と足で描く芸術家協会

病気や事故などで手の自由を奪われながらも、努力と練習を重ね口や足に筆をとり作品を作り出す画家たちが、自立を目指す団体です。障がい画家が口で描く実演を披露。ワークショップでぜひ皆さんも口で描く体験をしてください。

ステージ・展示

NPO法人みんなのダンスフィールド

年齢、性別、障害の有無をこえ、身体での共創表現の実現を目指すグループ。手と手を合わせ、身体をいっしょに動かし、表現をする「であわせ」をステージで行います。手のひらの温かさを感じ、表現が生まれる瞬間を共有しませんか?

ステージ　5日 10:15〜

花師 ミナさん

聞こえない花アーティスト

聴覚障がい者初のフラワーアレンジメント講師として、さまざまなメディアで幅広く活躍中の花師ミナさんが、2日目のステージに登場!手話を交えたフラワーアレンジメント講座を華やかに実演します。

ステージ　4日のみ

北斎ヨガ

講師:オカザキ恭和(北斎ヨガ考案者)

世界の巨匠、葛飾北斎が描いた江戸の人物を手本に行うヨガ。肉体・骨格の仕組みを熟知した北斎のユーモア溢れる人物画から日本の身体を、肚・丹田を楽しく体感できます。今回は椅子で行なうバージョンで、どなたでもご参加いただけます。

展示

みんな北斎展

すみだ北斎美術館開館記念プロジェクトとして、昨年12月9〜11日に開催された、全国障害者アート公募展「みんな北斎」の入賞作品を特別展示。北斎に負けず劣らず、チャレンジマインドあふれる作品を間近でご覧あれ!

ワークショップ

紙工房 畳地堂

すみだの小さな製本屋さんのワークショップ「紙のバイキング」。製本時の余り紙を、食べ放題のバイキングのように自由に選んで組み合わせたら製本機でガッシャーンと製本体験。世界に一つのオリジナルノートがその場で完成します。

ワークショップ

一般社団法人 日本ユニバーサルマナー協会

自分とは違う他かの視点に立ち、適切な理解のもと、行動するためのマナー「ユニバーサルマナー」の理解と定着を目的とした団体。ワークショップではアイマスクをして粘土細工を体験。難しさだけでなく新たな楽しみや気づきが得られるかもしれません。

ワークショップ

スネイリーズ®

ユニバーサルデザインの通園・通学グッズブランド「スネイリーズ」による、算数アプリ「ゆっくりさんすう」体験コーナー。納得しないと身につかない数の概念をゲーム感覚で体感。超スモールステップで、繰り返し遊ぶことで算数への道筋を作ります。その他グッズ紹介も!

Snaily's TINY SHOP®

ワークショップ

宮澤 ナツさん

絵本作家・イラストレーター

乳幼児から小学生高学年まで幅広く、絵画や版画のワークショップを実施しているイラストレーターの宮澤さん。今回はなんとパスタマシーンを使った版画のワークショップを開催します。ぜひ親子でご参加ください。

ワークショップ

吉原 順一さん

造形作家・装丁家

ブックデザインとペーパークラフトで活動中の吉原さん。一枚の紙を使いきって立体に仕上げる紙工作から、今回は「つつむ・結ぶ」をテーマにメッセージ作品を作ります。一枚の紙の変化を体験し、結び集う作品を楽しんでください。

展示

横浜能楽堂

より多くの人に能・狂言を届けるため「バリアフリー能」公演を実施しています。サポートの取り組み紹介をはじめ、演目解説イラスト付きパンフレット、視覚障害者のための能舞台の触図などを展示。ぜひ手に取って体験してください。

展開内容:

◆障がいを持つが文化・芸術的な分野で活躍する文化人の親による基調講演

盲目のピアニスト・辻井伸行氏の母・辻井いつ子氏による講演

子どもに対する文化教育の必要性、障がい者との接し方についてなど。

◆パラリンピアン/オリンピアンのトークショー

オリンピック選手　三宅宏実氏とパラスポーツ選手マクドナルド・山本恵理氏によるトークショー

オリンピアン、パラリンピアンとの交流による機運の醸成。

◆文化・芸術的な分野で活躍する障がい者によるパフォーマンス披露

障がい者によるフラワーアレンジメントのパフォーマンス展開や、障がい者、健常者だれもが参加可能なヨガ体験、出展団体によるパフォーマンス展開。

◆子ども向け文化プログラム(ワークショップ)

障がいの有無に関わらず子ども向けの文化・芸術体験ワークショップの展開

文化・芸術体験を通じての障がい者との交流の場を提供。

◆障がい者団体による芸術的作品の展示

国内外の障がい者アーティストの作品展示を展開

◆高齢者・障がい者体験コーナー

アイマスクをしての粘土細工の体験をはじめ、障がいを体験できる体験コーナー

◆みんな北斎コーナー

墨田区で行われた、障がい者アートコンテストの受賞作品展示

＜PR 手段＞

・東京新聞 15 段紙面告知、イベント載録記事掲載

・HEART＆DESIGN for ALLにてイベント特設 WEB サイトの開設

・HEART＆DESIGN for ALLFacebook ページにてイベント紹介

・イベントプログラムチラシ（A3 サイズ）の作成、出展団体、連携団体・施設へ配布協力

・イベント集客増加を狙い、イベント当日に会場周辺（両国プール・両国駅前の江戸NOREN・スカイツリーソラマチ内すみだまち処）にてプログラムチラシの配布

・株式会社ミライロが持つ障がい者モニターへのメール配布

・当日イベントチラシの配布

＜イベントでの工夫＞

・当日運営スタッフ、ボランティアスタッフに対し、オリエンテーションを行い、障がい者との正しい接し方、ユニバーサルマナーについての講座を実施。来場者の満足度向上を図った。

　また、当日のイベントスタッフには講座を受けた者、ユニバーサルマナー検定 3 級以上の取得者を配置した。

▲（左）2017 年 1 月 26 日付東京新聞朝刊 15 段告知原稿

（右）2017 年 2 月 15 日付東京新聞朝刊 15 段イベント載録原稿

※ユニバーサルマナーとは？

高齢者や障がい者、ベビーカー利用者、外国人など、多様な人々と接するときに“自分とは違う誰かの視点

に立ち、行動すること”は、特別なことではなく「こころづかい」。そのために必要なマインドとアクションを日本ユニバーサルマナー協会では「ユニバーサルマナー」と名付けている。

※ユニバーサルマナー検定とは？

自分とは違う誰かの視点に立ち、行動する人をそだてることを意識して、ユニバーサルマナーの実践に必要な「マインド」と「アクション」を体系的に学び、身に付けるための検定。障がいのある当事者がカリキュラムを監修しており、車いすを押すという1つのサポートでも「かける言葉」「歩くスピード」などを障害のある講師が当事者として指導する。本当に喜ばれる細やかな配慮を身に着けられるよう、当事者ならではのこだわりと発想を盛り込んでいる。

・墨田区との連携により、区立両国中学校をイベント会場に設定するとともに、在校生を対象にボランティアを募集した。自治体、学校との連携で、2020 年大会に向けた機運醸成とボランティア精神の育成および、障がい者の文化・芸術的活動に触れる機会創出を図った。

・受付にて来場者に声がけを行い、障がい者へのフォローアップを実施するとともに、受付、各出展団体に筆談器具の設置、手話通訳者、8 か国語対応スタッフを用意。障がいを持つ来場者のホスピタリティの向上を図った。

・イベント会場との連携により車椅子の導線を確保し、来場者へのバリアフリーの確保を徹底。

・イベント会場入口をわかりやすくするため、会場周辺に案内スタッフを配置し、会場案内の他、通行者にチラシを配布し、イベントへの誘引も行った。

・乳児連れの来場者のために、授乳室・おむつ交換スペースを設置した。

効果と課題

効果

調査概要

イベントの興味、満足度に加え、文化芸術活動に対する調査を、イベント来場者へのアンケート（回答数 154）、文化芸術活動に対する調査をミライロが保有する障がい者モニター（回答数 166）、東京新聞読者（回答数 217）に対して WEB にてアンケート調査を実施した。

イベント終了後は出展の 9 団体と学生ボランティアに対しイベントへの満足度、課題についてアンケート、ヒアリング調査を行った。

1.効果① イベント来場者満足度と調査回答取得数

・イベント来場者数：374 名（2 日間合計）

・アンケート取得数：154 件（2 日間合計）

来場者の増加が伸び悩んだものの、アンケート回収率は約 40%と高かった。イベントに対する満足度に関しては、96.7％の方が満足したと回答しており、不満と答えた方は 3.2%しかいなかった。また、イベントスタッフによる声掛けのタイミングに関しても不満と答えた方は 1.3%しかおらず、ボランティアスタッフへの事前レクチャー、受付での「何かお困りのことがあればお声がけください」とい

うフォローアップが効果的に働いた結果となった。 会場内のバリアフリーに対しする満足度は非常に高かったが、会場までのアクセスには 12.5%の方が不満と回答している。

来場者アンケート

文化芸術活動を楽しむことができた

選択肢	回答率	回答数
とてもそう思う	34.6%	53
そう思う	62.1%	95
そう思わない	3.3%	5
全くそう思わない	0.0%	0
	回答数	153
	スキップ数	1

来場者アンケート

イベントスタッフによるお声掛け（タイミング、内容）

選択肢	回答率	回答数
大変満足	67.3%	103
満足	31.4%	48
不満	1.3%	2
大変不満	0.0%	0
	回答数	153
	スキップ数	1

来場者アンケート

会場内の移動（段差やスロープ）

選択肢	回答率	回答数
大変満足	42.8%	65
満足	55.3%	84
不満	2.0%	3
大変不満	0.0%	0
	回答数	152
	スキップ数	2

来場者アンケート

会場の場所、アクセス

選択肢	回答率	回答数
大変満足	37.5%	57
満足	50.0%	76
不満	10.5%	16
大変不満	2.0%	3
	回答数	152
	スキップ数	2

2.効果② 自治体連携による中学生ボランティアとの連携と意識改革

今回、墨田区との協力することにより、会場の両国中学校の中学生ボランティアとの連携することができた。※墨田区の両国中学校は本事業とは別事業で、墨田区主導で、一部の生徒（希望者）がユニバーサルマナー検定 3 級を受講するなど心のバリアフリーの教育が進んでいる。

また、イベントのボランティアに参加する学生に事前にユニバーサルマナー講座を実施することで、積極的に来場者に話かけることができるようになり、来場者の満足度も高かった。後日、参加したボランティア学生からのアンケートで、「今後の日常生活でも学んだことを活かしていきたい」や「今度はユニバーサルマナー検定 2 級を受講したい」などの意欲的な意見も寄せられた。本事業を通じて、これから未来を担う世代に心のバリアフリーの推進、今後の共生社会実現に向けての土台を築くことができた。

3.効果③ 2020 年東京オリンピック・パラリンピックへの機運醸成

「2020 年オリンピック・パラリンピックの開催にあたり、文化を通じて盛り上げていることを知っているか」の問いに対して、来場者アンケートでは 62.0%の方が知らないと答えており、東京新聞読者調査でも 66.4%と、十分な認知獲得は行えていなかった。本イベントで「2020 年オリンピック・パラリンピックへの機運が高まると思いますか」の問いに対しては、来場者の 81.0%が高まったと答えているが、東京新聞読者調査では「文化芸術イベントにより東京五輪への機運が高まるか」に対しては、約 44.7％の人が機運は高まらないのではないかと感じていた。（※「あまりそう思わない…35.0％/まったくそう思わいない 9.7％」）今回のようなイベントに参加して、各出展団体やトークショーなどが参加者の機運上昇につながったのではないかと思われるが、この結果を通じて、実際に文化芸術活動と一緒にオリンピック・パラリンピックの要素をより積極的に盛り込んで実施していくことが大切だと思われる。

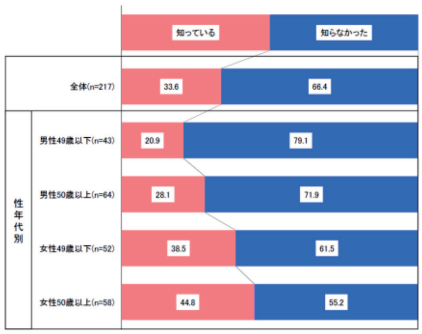
東京新聞読者調査

来場者アンケート

政府は、東京オリンピック・パラリンピックの開催にあたり、「文化を通じた盛り上げ」に取り組んでいることをご存知でしたか？いずれかをお選びください。

選択肢	回答率	回答数
知っている	37.9%	58
知らなかった	62.1%	95
	回答数	153
	スキップ数	1

■東京五輪開催に際し「文化を通じた盛り上げ」取り組み認知 （n；有効回答者）



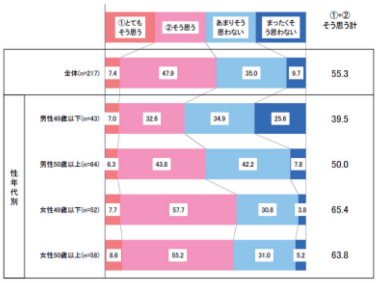
東京新聞読者調査

来場者アンケート

本イベントを通じて、東京オリンピック・パラリンピックへの機運が高まると思いますか？

選択肢	回答率	回答数
高まった	81.0%	124
高まっていない	19.0%	29
	回答数	153
	スキップ数	1

■文化芸術イベントにより東京五輪への機運が高まると思うか （n；有効回答者）



4.効果④ 文化芸術活動に関する考えと課題の把握

文化芸術活動に対する考え方について来場者アンケートでは、95.3%の方が大切である（非常に大切だ＋ある程度大切だ）と感じているのに対し、ミライロの障がい者モニターでは 86.7%、東京新聞読者調査では80.2%と文化芸術活動に対する比重の違いが表れた。また、文化芸術活動を鑑賞する上での課題の問いに対して、障がい者の文化芸術活動の意思決定において、バリアフリー情報の有無が大きな要因となることが分かった。

障がい者アンケート

来場者アンケート

あなたの文化芸術活動に対するお考えを教えてください。

選択肢	回答率	回答数
非常に大切だ	65.5%	97
ある程度大切だ	29.7%	44
どちらともいえない	4.7%	7
あまり大切ではない	0.0%	0
まったく大切ではない	0.0%	0
	回答数	148
	スキップ数	6

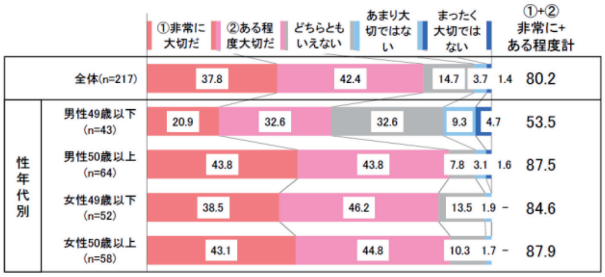
文化芸術活動に関するアンケート

あなたの文化芸術活動に対するお考えを教えてください。

選択肢	回答率	回答数
非常に大切だ	41.8%	66
ある程度大切だ	44.9%	71
どちらともいえない	10.8%	17
あまり大切ではない	1.9%	3
まったく大切ではない	0.6%	1
	回答数	158
	スキップ数	8

東京新聞読者調査

■文化芸術活動に対する考え （n；有効回答者）



障がい者アンケート

来場者アンケート

あなたが文化芸能を鑑賞する上での課題を教えてください。（複数選択可）

選択肢	回答率	回答数
鑑賞する場所・施設や作品・イベントなどの情報が少な	62.8%	93
ホール・劇場、美術館・博物館、映画館など鑑賞する場	19.6%	29
ホール・劇場、美術館・博物館、映画館などで鑑賞した	6.8%	10
バリアフリー情報の有無およびその内容が分からない	10.1%	15
料金（チケット代・入場料など）が高い	51.4%	76
鑑賞する仲間がいない	19.6%	29
解説・説明してくれる人がいない	23.0%	34
時間がとれない	8.1%	12
その他	1.4%	2
特に不満はない	8.1%	12
回答数		148
スキップ数		6

文化芸術活動に関するアンケート

あなたが文化芸能を鑑賞する上での課題を教えてください。（複数選択可）

選択肢	回答率	回答数
鑑賞する場所・施設や作品・イベントなどの情報が少な	41.1%	65
ホール・劇場、美術館・博物館、映画館など鑑賞する場	28.5%	45
ホール・劇場、美術館・博物館、映画館などで鑑賞した	20.3%	32
バリアフリー情報の有無およびその内容が分からない	53.8%	85
料金（チケット代・入場料など）が高い	32.3%	51
鑑賞する仲間がいない	12.0%	19
解説・説明してくれる人がいない	17.7%	28
時間がとれない	19.0%	30
その他	7.6%	12
特に不満はない	8.9%	14
回答数		158
スキップ数		8

文化芸術活動を行う際の課題に対しては、健常者、障がい者ともに、活動情報の少なさを挙げている方の割合が多く、「一緒に活動する仲間が見つからない」が 34.7%（障がい者は 20.0%）・「活動してるグループやサークルの情報が少ない」が 41.5%（障がい者は 24.5%）。障がい者が文化芸術活動の行う際の課題の特徴としては、「時間がとれない 25.8%（健常者 9.5%）」ことを課題としている割合が多かった。その他の質問でも障がい者は時間がないと感じている割合が多かった。

障がい者アンケート

来場者アンケート

あなたが文化芸術活動をおこなう上での課題を教えてください。（複数選択可）

選択肢	回答率	回答数
施設・会場などのバリアフリー情報の有無およびその内	10.9%	16
場所・施設の利用料が高い	12.2%	18
受講料や参加料が高い	26.5%	39
一緒に活動する仲間が見つからない	34.7%	51
指導してくれる人が見つからない	26.5%	39
練習や創作をする適当な場所・施設がない	6.8%	10
自分で学ぶための良いプログラムがない	32.0%	47
活動しているグループやサークルの情報が少ない	41.5%	61
展示や発表をする適当な場所・施設がない	7.5%	11
活動のお知らせや発表会・展示会などの情報が少ない	12.9%	19
時間がとれない	9.5%	14
特に不満はない	12.2%	18
回答数		147
スキップ数		7

文化芸術活動に関するアンケート

あなたが文化芸術活動をおこなう上での課題を教えてください。（複数選択可）

選択肢	回答率	回答数
施設・会場などのバリアフリー情報の有無およびその内	44.5%	69
場所・施設の利用料が高い	19.4%	30
受講料や参加料が高い	27.1%	42
一緒に活動する仲間が見つからない	20.0%	31
指導してくれる人が見つからない	18.7%	29
練習や創作をする適当な場所・施設がない	18.1%	28
自分で学ぶための良いプログラムがない	23.2%	36
活動しているグループやサークルの情報が少ない	24.5%	38
展示や発表をする適当な場所・施設がない	7.7%	12
活動のお知らせや発表会・展示会などの情報が少ない	16.1%	25
時間がとれない	25.8%	40
特に不満はない	11.6%	18
回答数		155
スキップ数		11

課題

1.課題① 来場者が少なかった

イベント当日の来場者数と当初見込んでいた来場者数を比較すると、当日の来場者数が少なかった。集客が振るわなかった要因のひとつとして、本事業採択決定から、開催日まで時間的余裕が無く、参加団体増加への適切な案内や、十分な告知などができなかったことが挙げられる。参

加団体からも準備の時間が短かったというヒアリング結果もあり、余裕のある準備期間の確保が必要だということを痛感した。

本来、会場の決定から各コンテンツの出展調整交渉（レイアウト決めから各ブーススペースなども含めての仕込み期間）、PRを含めて考えると最低 3～4 か月は必要だった。十分な準備時間を確保し、出展交渉、PR 活動に時間をかけることで、イベント内の芸術的なコンテンツを増やし、誘致した団体の PR を新聞紙面やその他の媒体で魅力的に告知する必要があった。

自治体との連携で中学校での開催になったが、区役所のさまざまな部署、商店街を巻き込んでの展開については、今回、自治体の「共催」ではなく「協力」というレベルでの事業連携のため、実施概要を調整している中での交渉は難航した。実施概要を決めてからの交渉スタートが一般的なため、今回のように事業実施契約から事業日まで 2 週間程度という制約があるスケジュールではチラシの配布場所が限られた（※両国駅前の江戸NORENの観光案内所、スカイツリーソラマチ内すみだまち処、区役所観光課窓口、会場施設内プールでの配布。一部中学校保護者への配布）。また、会場周辺の文化施設では、いかなる理由でもパンフレットを置くことに対しては断るという施設もあった。

ユニバーサルアートフェスティバル in すみだに関する出展者アンケート

イベント開催前に提供された情報

選択肢	回答率	回答数
大変満足	11.1%	1
満足	22.2%	2
不満	66.7%	6
大変不満	0.0%	0
自由記述欄		3
	回答数	9
	スキップ数	0

番号	コメント
1	ではないか。他の参加団体の情報も知っていたほうが、お互いのつながりを持てたかもしれない。
2	開催までの準備期間が短かった
3	時間が短かったため、どのようなイベントかイメージし難かった。

上記状況を踏まえ、商店街連合会や関連の福祉施設、中学校などにチラシ等を配布する場合は、交渉・調整の期間を十分に確保し、開催 1 か月前には配布を開始していることが望ましい。

また、準備時間の確保により、充実した PR 活動の下、自治体との共催を実現し、関係各所の協力を得ることでより多くの集客が可能となると考える。

2.課題② タイトル選定

「ユニバーサルアートフェスティバル in すみだ」というタイトルに対しどんなイメージを持つかを東京新聞読者調査（FA）で実施したところ、一部の人には主催者側の解釈「制約のない、ジャンルを問わない自由なアートイベント」をイメージしている人が 13.4%。“世界”“国際”というイメージを持ったという回答が 22.1%と多く、“ユニバーサルアート”というワード自体の認知が低いことが分かった。イベント両日で約 3800 枚のチラシを配布してPRするも、子連れの来場者は興味関心を示したが、年配者はチラシからの誘導は少なかった。

タイトルについては「誰もが楽しめる自由な芸術祭 in すみだ」の方がよかったのかもしれない。

東京新聞読者調査※(　)内は回答者の性年代

■自由回答(名称からどのようなイベントを想像するか)　※(　)内は「性年代」

※自由回答文から分類すると以下の通り

①概ね趣旨と合致…13.4%
- 分け隔てのない、幅広い層が出展する祭典?(男性40代)
- 墨田区で開催されたイベント、自由な発想芸術で良く解らない、(男性60代)
- 老若男女問わず、健常者もそうでない人も、また、いろいろなジャンルのアートが集結したイヴェント。(女性50代)

②漠然と「すべての人」「誰でも」…7.4%
- どんな人でも芸術を楽しむ大会?(女性50代)

③「障がい者」のみ…5.5%
- 障害者アート(男性30代)
- 福祉のイメージ(女性29歳以下)

④「ユニバーサルデザイン」起因…5.5%
- 世界共通(男性50代)
- ユニバーサルデザインの絵や作品の展示、イベント。(女性30代)

⑤「国際」「世界」「宇宙」…22.1%
- 世界的な絵に関するお祭り(男性29歳以下)
- 1.世界中のアーティストの祭典 2.宇宙を意識したアートの祭典 3.ユニバーサルデザインがコンセプトの祭典(男性50代)
- 国際的な芸術の祭典(女性30代)

○)漠然と「すべて」「誰でも」を連想(7.4%)、「障がい者のみ」を連想(5.5%)、「ユニバーサルデザイン」を連想(5.5%)した人を含めると、障がい者も健常者も同じ**「自由なアートイベント」という趣旨に近い印象を3割の人が受けた様子。**

×)一方で、「国際」「世界」「宇宙」を連想した人が22.1%。その他、とらえどころがなかった人も含めると、7割近くがタイトルから趣旨をイメージできなかったとも取れる。

3.課題③　PR不足

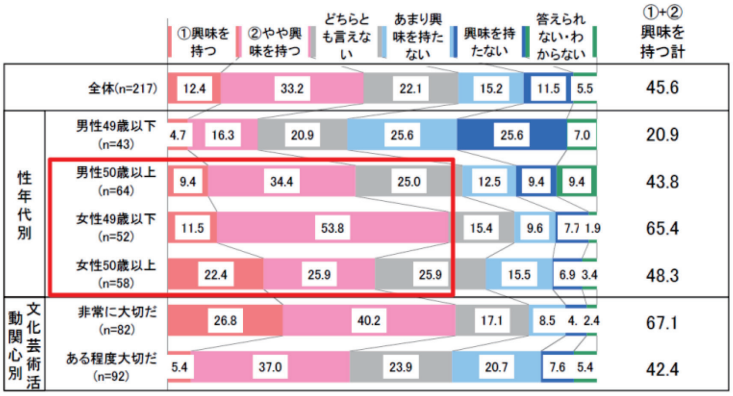
今回、チラシ印刷をしての納品、新聞広告掲載などのPRが事業日の 10 日前からしか開始できず、新聞広告も複数回掲載することができなかった。弊社の経験からは、出演者やテーマにもよるが一般的な 1,000 人規模の講演会開催にあたり、モノクロ 5 段スペースを複数回、20 段程度を掲載している。また、ミライロによるモニターへのメールマガジンの配布、Hart & Design For All の Facebook ページでの告知、Facebook への広告出稿等、SNS を活用した告知も行った。

東京新聞紙面の読者調査では、「ユニバーサルアートフェスティバル」と聞いて興味を持つ人は 45.6%と半数近い。性・年齢別にみると女性 49 歳以下については 65.4%と高く、男性 49 歳以下を除いては多数が興味関心を示している。また、イベント内容の広告接触後の数値についても男性 49 歳以下を除いては各年齢 5 割を超える。

広告接触後の数値と前述のユニバーサルアートという言葉の認知の低さから、内容をきっちりとわかりやすく、伝えることが必要だということがわかる。

コンテンツ自体には少なからず興味関心のある人が多いなかで、この来場者数についてはPR不足だということが言える。

■事前の「ユニバーサルアートフェスティバル」興味　(n:有効回答者)



4.課題④ 障がい者向け情報の欠如

今回の調査で、障がい者の芸術活動参加への意思決定においてバリアフリー情報は欠かせないという結果が分かった。本イベントの告知物に対しては詳細なバリアフリー情報を載せることなく、健常者の目線での告知制作になっていた。

告知紙面、チラシ配布後に事務局に寄せられた問い合わせでは「車いすでも会場に入れるか？」、「会場近くの駐車場について」、「手話対応などがあるか？」などの問い合わせが多かった。必要なバリアフリー情報として以下の内容を今後は掲載する必要がある（図は障がい者を対象としたアンケートの結果）。

文化芸術活動に関するアンケート

あなたが文化芸術活動をおこなう上での課題を教えてください。（複数選択可）

選択肢	回答率	回答数
施設・会場などのバリアフリー情報の有無およびその内	44.5%	69
場所・施設の利用料が高い	19.4%	30
受講料や参加料が高い	27.1%	42
一緒に活動する仲間が見つからない	20.0%	31
指導してくれる人が見つからない	18.7%	29
練習や創作をする適当な場所・施設がない	18.1%	28
自分で学ぶための良いプログラムがない	23.2%	36
活動しているグループやサークルの情報が少ない	24.5%	38
展示や発表をする適当な場所・施設がない	7.7%	12
活動のお知らせや発表会・展示会などの情報が少ない	16.1%	25
時間がとれない	25.8%	40
特に不満はない	11.6%	18
	回答数	155
	スキップ数	11

・アクセス情報　・バリアフリールート／公共交通機関（駅のバリアフリーについて等）

・車いす用駐車場の有無　・会場のエレベータ・スロープの有無

・聴覚障害者の情報保障（手話通訳／筆談）　・掲示物などの読み上げサポート

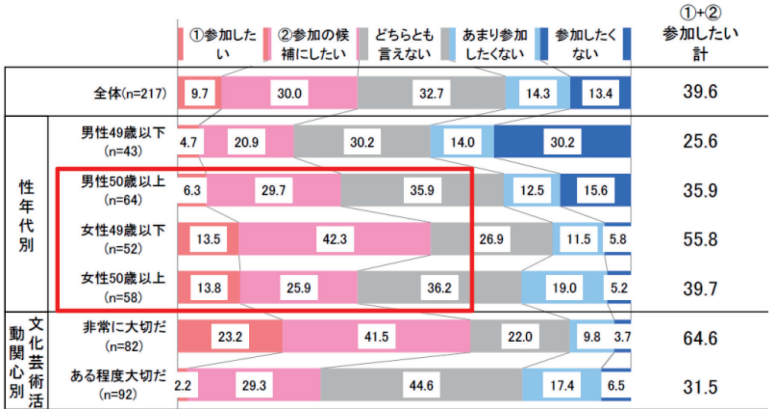
・告知物のテキスト情報　・オストメイト対応トイレ、多機能トイレの有無

・授乳室の有無　・電動車いす用の充電コンセントの有無

・スタッフのサポート体制（障害に対する知識、理解があるか）

5 課題⑤ 会場の選定について

■「誰もが楽しめる自由な芸術祭」参加意向 （n；有効回答者）



コンテンツについては興味関心のある人が多いが、東京新聞読者調査から次回同様のイベントがあった場合の参加意向として、参加したい9.7%に対して、「参加の候補にしたい」+「どちらともいえない」の中間層が6割以上を占めるため、ユニバーサルアートという名称では、参加の意思決定までには至らないことが分かる。ユニバーサルアートという言葉自体の認知が低く、正しく理解されていないことからも、わかりやすいタイトルの選定とクローズドな会場ではなく、通行量が多く立ち寄りやすいオープンな場所での実施が好ましいと分かった。

今回の会場選定にあたり、2020 年オリンピック・パラリンピックに向けた人材教育という観点から、中学生との連携を第一に考え、両国中学校に決定した経緯があった。近年の教育施設はバリアフリー整備が施されており、生徒・保護者が参加をし易いなどの要因も選定理由とした。

会場決定から短期間での調整だったため、中学校の部活動の関係で、施工開始が前日の部活動終了後の 16 時過ぎからの施工開始となった。施設の管理については指定管理者の都合上 21 時撤収、早朝に施工が実施できないなど作業時間が限られたため、施工デザイン等にも影響があった。今回出展者からは、各作品に対してのスポットライトがあったほうがよかったという声がスタッフに寄せられた。

会場周辺道路に誘導スタッフを配置して誘導をしたが、当初の来場者見込みよりも参加者数が少なく、誘引の為のチラシ配布にスタッフを配置し、会場までの誘導人員を誘引に充てたことでの人員不足が課題となった。また、実施までの時間の関係で部活動をすべて中止することが不可能であったため、安全面から球技の部活を行っている校庭側からの導線が使えず、特にわかり難かった。恒常的に一般の人が来場する施設ではないため、校門前にスタッフを配置して対処したが、誘導しきれずに校庭側からの入場もあった。

バリアフリー整備が整っているとともに認知度の高い施設の選定、十分な誘導スタッフの配置が課題となった。

6 課題⑥ コンテンツの有効活用について

本イベントの体制として、事前募集の方式ではなく、当日参加を主体としたイベントであり、当日を迎えるまでどのくらい集客できるかが不明瞭であった。オープンなイベントの為、事前募集の方式が取れないのであれば、同会場、または近隣の会場にて誘致したコンテンツを活用した独自の講演会、ワークショップ等を開催し、相互集客を図ることで、来場者数の担保が実現できたのではないかと考える。本イベントにおいても、著名な方の講演会等をコンテンツとして誘致したため、誘致したコンテンツを最大限活用する施策が必要であった。

将来計画

＜両国中学校生徒によるボランティアスタッフの効果と将来性＞

墨田区との連携により、地元中学生ボランティアとして13名の両国中学校生徒と共にイベント運営を行った。ボランティアスタッフに対し、後日ヒアリング調査を行ったところ、仕事の内容は難しかったと答えながらも、楽しく活動することが出来たという結果になり、事後のヒアリング調査では全員が次回も参加したいと感じると答える結果となった。さらに、ユニバーサルマナー検定 2 級の受講意思が芽生える生徒や、今回の体験を今後に生かしていきたいという生徒も見受けられ、2020 年オリンピック・パラリンピックに向けた将来の人材育成の場となった。

ボランティア対象が両国中学校 1 校に限られたが、区立中学校全体での連携をする場合には教育委員会の指導室に話を通したうえで、各校の校長が集まる校長会で時間をもらい説明、各学校の意向集約、日程調整などの手続きを踏む必要があり、日程調整から実施までは最低でも3か月は必要だということが、事後のヒアリングで分かった。実施時期については、墨田区の場合は基本的に 2 期制を引いており、5 月、6 月に修学旅行・運動会を実施する学校が多く、1 月、2 月は 3

年生が受験のため 3 年生の参加は難しいとのこと。比較的行事が多いが秋口での実施を検討する等、地域の特色、ボランティア目線での開催時期検討が必要であると考える。

＜自治体との連携による地域一体型イベントの創造＞

地元中学生ボランティアスタッフの協力は成功したが、来場者や、墨田区長からは、アクセスや認知度においてもっと良い会場で開催時間がもう少し長ければ、さらに盛り上がり、来場者も増えただろうとの言葉をいただいた。今回、墨田区との連携は図れたが、他の中学校や養護学校、福祉施設や障がい者支援施設等との、幅を広げた地域連携が出来なかった。地元中学生のボランティア活動の成功事例を踏まえ、将来的な人材育成のため、時間をかけて積極的な自治体との交渉、調整を図り、地域一体型イベントの開催を目指すことが重要であると考える。今回は「協力」という枠組みであったが、連携を強め「共催」という形で共同実施することも一つの手段だと考える。より多くの地域住民がユニバーサルな考え方を学ぶことが 2020 年オリンピック・パラリンピック開催に向けた機運醸成と人材育成が図れると考える。メディアとして地域と一緒に取り組み、地域一体型のイベントの創造を目指していく。

〈イベント出展団体の現状と課題について〉

今回のイベントにおいて、出展団体の交渉は難航した。声をかけたが出展を見合せた団体から二つの傾向が見られた。まず、一つ目の傾向は、団体からの出展希望はあるものの、日程、人手、金銭的に物販ができないという点。二つ目の傾向は、他の出展団体との芸術的なクオリティーの違いから出展をしない団体がいたという点。後者の団体からは、目指す芸術的なクオリティーの違い、今回のイベント自体を「福祉」のイメージに近いので出展しないという判断に至った団体もいた。このことから、人手、金銭的なフォローを図るため、協賛金・人材提供が可能な民間団体に声がけを行い、イベント協賛を可能にすることの検討がこの課題に対する有効な解決策だと考える。また、芸術的なクオリティーの違いから出展いただけない団体について、お互いの活動内容を知り、尊重しあえるようなプラットフォーム構築が必要であり、東京新聞と株式会社ミライロで取り組んでいる「HEART＆DESIGN for ALL」のプロジェクトがその役目を果たすことで今後解決していけるのではないかと考える。

今回のイベントでは趣旨に賛同いただいた団体・個人が多く出展いただき、イベント当日には出展者同士での名刺交換や情報交換をする場も見受けら、事後のヒアリングでも障がいを持つ芸術団体がコミュケーションを取れる場が貴重であると分かった。ステージの出演者からは、大きなステージではないことが、参加者の声や表情などが伝わってきて楽しかったという声を得ることが出来き、プログラムを体験する人と向き合うことができた。またこのようなPRする場を探しているので今後も声をかけて欲しいなどの声を頂戴した。

今後、東京新聞と株式会社ミライロで取り組んでいる「HEART＆DESIGN　for ALL」のプロジェクトをさらに拡大し、健常者と障がい者の心理的バリアフリーを推進するとともに、各種団体との交流、連携強化をしていくことで、障がい者支援の NPO 法人や趣旨賛同をしていただける民間企

業を繋げ、このようなイベントに引き続き取り組んでいきたい。中日新聞社としても「ユニバーサルアートの普及」という観点から、バリアフリーという福祉面の正しい知識の普及とクオリティーの高い芸術が一堂に紹介できるイベントを企画し、1 箇所の会場開催ではなく、複数会場の展開でより多くの人たちにアプローチできる内容が望ましいということが本事業から分かった。大々的なイベント開催により民間企業の協賛も募りやすく、人手が足りない団体への人材提供、告知を充実させるための資金活用に繋げることが出来ると考える。

また、情報発信分野においては、調査によって判明した、文化芸術活動における課題のクリア、障がい者への正しい情報発信方法強化を努め、誰もが自由に参加できるイベントの実施と、様々な境界線を取り払えるプラットフォームになるよう目指していく。

以上